

2026/02/15

メッセージ：「あなたの時は、今年来るのでしょうか？」

おはようございます。天の父なる神様の家へようこそ来られました。

このメッセージにおいて私は、「死への恐れ」との戦いに勝利するようクリスチャンを励ますため新約聖書に示されている意味を明らかにします。

前回の私のメッセージで、私たち 1 人ひとりが、2026 年にどのような試練に直面するかもしれないかを深く考え、自らを省みるよう促しました。自然災害や戦争といったいくつかの危機的な出来事を取り上げました。

これらの出来事は、私たちに「2026 年において、何が私たちをイエス様から離れさせようとするのだろうか」と自問させることになるかもしれません。自分の理解を超えて主なる神様を信頼しない、あるいは未知なるものへの恐れで、多くの人が主なる神様から離れます。

今朝のメッセージでは、「死への恐れ」に焦点を当てていきます。自然界の出来事や地上で起こる戦争には、確かに多くの未知があります。これらの出来事の多くは、私たちの理解を超えています。

しかし、死についてはそうではありません。聖書は、クリスチャンにとって死に関して未知なものは何 1 つないと、はっきりと教えています。唯一の未知は、「私の時」がいつ、どこで来るのかということだけです。

先月もお話ししましたが、私たちは心に恐れが入り込むとき、信仰が外へ追い出されてしまうということを、覚えていなければいけません。

### キリストにあるクリスチャンの永遠の命

聖書箇所<コリント人への手紙 I 15 章 52-56 節>を読みます。

<コリント人への手紙 I 15 章 52-56 節>

**52** 終わりのラッパが鳴り渡る時、一瞬のうちにそうなるのです。天からラッパの音が響くと、死んでいたすべてのクリスチャンは、たちまち朽ちない新しい体に復活します。次に、まだ生き残っている者もまた、一瞬にして新しい体に変わるのです。

**53** なぜなら、地上の死ぬべき今の体は、天上の決して死ぬことのない、永遠に生きる体に変えられなければならないからです。

**54** この時、「死は勝利にのみ込まれた」（イザヤ 25・8）という聖書のことばが現実となるのです。

**55・56** 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」（ホセア 13・14）罪、すなわち死をもたらずとげは、ことごとく切り取られます。そして、罪をあばく律法も、もはや私たちをさばきません。」

死を避けたいという人間の自然な願いは、私たちクリスチャンを皆、神様の最後のラッパが鳴り響くときに、むしろなお生きていたいと思わずのかもしれませんが。これが、すべてのクリスチ

ヤンの携挙（キリストが天から再臨するときに、地上のキリスト教徒が不死の体になり空中に持ち上げられてキリストに会うという出来事を指す）と復活の時です。

しかし、この2026年の間、すべてのクリスチャンは、目に見える形ではありませんが、死を経験し、イエス様と共にいるためにこの世を去っていきました。イエス様はその「死のとげ（苦しみ・力）」を取り去ってくださっているものを、なぜ恐れるのでしょうか。

使徒がくコリント人への手紙 I 15章 55-56節>に書いたとおりです。

<コリント人への手紙 I 15章 55-56節>

55・56「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」（ホセア 13・14）罪、すなわち死をもたらすとげは、ことごとく切り取られます。そして、罪をあげく律法も、もはや私たちをさばきません。」

## 人間の自然な恐れ

神様は、すべての生き物に、命の危険が迫る危機において身を守るために危険を避けること、交通量の多い通りを渡る際に注意を払うこと、あるいは、流行病の際にマスクを着用することのようにより、自衛本能の生まれながらの本能を創造されました。

ゴキブリでさえ、叩かれると仰向けになって死んだふりをします。そして数秒後に体をひっくり返し、安全な場所へと急いで逃げていきます。

これこそが、神様が私たち人間を含むすべての生き物の創造物に授けられた、生き延びようとする本能です。

実際、戦争において負傷した多くの兵士は、負傷した後、ゴキブリのように賢明に行動します。そしてまた別の日に戦うためにそっと立ち去るのです。

## 死への恐れ

前回の私のメッセージから引用します。

「もし中国がアジアへの侵攻を開始するならば、あなたは永遠のいのちよりも自分の肉体の命を重んじるのでしょうか。イエス様は、クリスチャンに、人を恐れるのではなく、神様を恐れ、敬うべきであると教えられました。<マタイによる福音書 10章 28節>

<マタイの福音書 10章 28節>

体だけは殺せても、たましいには指一本ふれることもできないような人々を、恐れてはいけません。たましいも体も地獄に落とすことのできる神だけを恐れなさい。

もし中国がたとえば国家としての日本の主権などで日本を侵攻するならば、この国を愛する私たちすべてにとって、さまざまな恐れが生じることは明らかです。しかし、その根底にある恐れは、侵略軍の手による苦しみと死であるでしょう。

神様はあらゆる試練の中であってイエス様を信じるすべての神様の子どもたちと共にいてくださると約束されていること以外に、私は痛みや苦しみがないと約束することはできません。

しかし、死について神様の御言葉が何を約束されておられるのかを、私は聖書から示すことができます。

## 死がこの世に入る - エデンの園・人間の墮落

<創世記2章16節-17節>

**16・17**ただし、一つだけきびしい注意がありました。「園の果物はどれでも食べてよい。だが、『良心の木』の実だけは絶対に食べてはいけない。それを食べると、正しいことと間違ったこと、良いことと悪いことについて、自分勝手な判断を下すようになるからだ。それを食べたら、あなたは必ず死ぬ。」

人であるアダムは、エバがサタンの偽りを受け入れ、善悪の知識の木の実を食べたとき、彼女のそばに立っていました。アダムの失敗はエバのものよりも重大でした。なぜなら、エバは彼の胸部、すなわち1本のあばら骨から造られ、彼女を守る権威でアダムは創造されていたからです。

悪魔の誘惑は、半分の真理でした。なぜなら主なる神様ご自身が、「善悪の知識の実」をもつようにその木を定められました。

そのため、彼らが食べた後、「善悪の知識の実」は自分たちの罪深い心の悪の知識、また、主なる神様から今や身を隠さなければならぬ善の知識を与えました。もし彼らがサタンに「ノー」と言っていたらということ想像してください。悪であるサタンの知識と、善である主なる神様の知識を、彼らは実際に受け取っていたことでしょう。

すなわち、サタンに逆らって、「善悪の知識の実」を食べることなく主なる神様に従うことによって、善と悪の知識を得ていたはずなのです。

このエデンの園では決して起こらなかったこの「真理」を、神様の御言葉と権威への従順について、私たち現代のクリスチャンは心に留めなければなりません。

### アダムと死

<ローマ人への手紙 5章12節>

**12** アダムが罪を犯した時、罪が世界に入り込みました。アダムの罪によって死が全人類に広まり、すべての人は死ぬように定められました。それというのも、すべての人が罪を犯したからです。

聖書は、神様が人類に下された呪いは、何よりもまず霊的な死であったことを明確に示しています。人類の罪の性質は、男女の結合によって生まれるすべての人に受け継がれました。しかし、イエス・キリストは聖霊なる神様によって宿された方であられるため、罪の性質はマリアから受け継がれることはありませんでした。

しかし、人類に下された呪いは霊的な死だけでなく、肉体的な死をも意味していました。聖書は、時代を追うごとに人の寿命が、ほぼ1000年に近い長さから、70年、あるいは健やかであれば80年へと変化していったことを示しています。もちろん、神様は、この聖書的な平均の例によれば、人の寿命、また早死両方について、神様の主権的な御心でされています。

クリスチャンとして私たちは、あまりにも頻繁に自分たちの肉体的な死に目を向けています。しかし、聖霊なる神様はグノーシス的な霊ではあられません。神様は、私たちの肉体のような物質的なものを悪であるとはお考えになりません。これらの身体を助けるために科学的な医療を求めることは、罪ではありません。私たちは、自分たちに与えられている科学を通して、自分たちの虚弱に自然な助けを求めるべきです。

しかし、それは祈りをもってなされるべきものです。死そしてキリストの再臨も、ともに人生の現実です。聖書が<ヘブル人への手紙 9章27-28節>で語っているとおりです。

<ヘブル人への手紙 9章 27-28節>

27 人間には、一度だけ死んで、その後さばきを受けることが定められているように、  
28 キリストも、多くの人の罪のためにご自身をささげて、一度だけ死なれました。そして、もう一度おいでになります。今度は罪を取り除くためではありません。その時は、彼を待ち望んでいるすべての人の救いを完成させるために来られるのです。

「Ten Thousand Reasons」のような素晴らしい讃美歌でさえ、【3番の歌詞】の中で

【3番の歌詞】

「そしてその日、私の力が衰え、終わりが近づき、私の時が来たとき」

と歌われています。

この讃美歌は、主イエス様に真の讃美と礼拝をささげています。「私の時が来た」という死の床にあってさえ、主イエス様を讃美し続けたいというクリスチャンの願いを表しています。それは素晴らしい願いです。

しかし私は、多くの人が実際には、「自分の時が来た」と悟ることなく、気づけば栄光のうちにあって、イエス様の御顔を仰ぎ見ている、ということになるのではないかと本当に信じています。人生と死を通して主イエス様を讃美し続けようとするその良い思いにかかわらず、私たちの肉体的な死に過度に意識を向けることは、死を通過した後に与えられる私たちの霊的な永遠のいのちという栄光の約束を見ることなしに、かえって見えにくくしてしまいます。

「自分の時がいつ来るのか」を推し量ることに心を奪われるこの誤った焦点は、永遠のいのちへの信仰が、死への恐れに置き換わってしまうという現実的な危険です。このように過度に意識を向けてしまうことは、神様が知恵をもって私たちの生と死を治めておられるという主権よりもむしろ、私たち自身の理解を重んじすぎていることとなります。

さらに、「自分の時が来たときにイエス様を讃美していなかったら、イエス様は私たちを天国に連れて行ってくださらないのではないかと」私たちは恐れているのでしょうか？ 聖徒の皆さん、私たちが頼らなければいけないのは自分達の忠実さではなく、主なる神様ご自身の忠実さです。使徒パウロは、その弟子テモテに、<テモテへの手紙Ⅱ 2章 13節>で教えました。

<テモテへの手紙Ⅱ 2章 13節>

しかしたとえ、信仰をなくしたかと思えるほど私たちが弱くなっても、キリストは真実を貫き、私たちを助けてくださいます。私たちは主の一部分になっているので、切り捨てられることはありません。そして、主はいつも約束を果たしてください。

また、恐れではなく信仰に立つべきであることを示す、クリスチャンへのもう1つの約束が、新約聖書の<ローマ人への手紙 6章 23節>に与えられています。

<ローマ人への手紙 6章 23節>

罪の支払う報酬は死です。しかし、神が下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスによる永遠のいのちです。

**死に打ち勝つ励ましとしてのイエス様の御言葉**

<ヨハネの福音書 5章 24節>

よく言うておきます。わたしの言うことを聞き、わたしを遣わされた神を信じる人にはだれでも、永遠のいのちがあります。罪のために罰せられることは絶対にありません。すでに死からいのちに移っているのです。

＜ヨハネの福音書 8章51節＞

51 よく言うておきましょう。わたしに従う者は、決して死なないのです」と言われました。

ここでイエス様は、ご自身の御言葉を守るクリスチャンは決して死を見ることがないと約束しておられます。決して肉体的に死なないとは言っておられなかったことに、私たちは注意しましょう。

「ブルース牧師、私達が死を見ないためには、主なる神様の御言葉をどれほど守らなければならないのですか？」とあなたは尋ねるかもしれません。

イエス様は、御言葉を守るための霊的な事柄を数字で私たちに示されませんでした。数字で示されると単に、主なる神様が十字架に釘付けにされた律法に立ち返ることになってしまうでしょう。しかし、律法の霊、今やイエス様の教えは、イエス様への愛という私たちの心にあります。神様が預言者エレミヤを通して＜エレミヤ書 31章33節＞に約束されたとおりです。

＜エレミヤ書 31章33節＞

新しい契約とはこうだ。わたしは、わたしのおきてを彼らの心に刻みつける。そのため彼らは、わたしをあがめたいという気持ちになる。こうして、彼らは文字どおりわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。

使徒パウロは、イスラエルの家とメシアであるイエス様を信じるすべての者として教会のアイデンティティを確かにしました。パウロは、＜ヘブル人への手紙 10章15-17節＞で＜エレミヤ書 31章33節＞を繰り返しました。

＜ヘブル人への手紙 10章15-17節＞

15 聖霊も同じ証言をされます。

16 「イスラエル人たちは最初の契約を破ったが、わたしが新たに彼らと結ぼうとしている契約はこれである。わたしは、常にわたしの意思を知らせるために、律法を彼らの心に書き記す。そして、律法を彼らの思いの中に据えるので、彼らは喜んでこれに従うようになる。」（エレミヤ 31・33）

17 さらに聖霊は、こうも言われます。「わたしは、二度と彼らの罪と不法を思い出さない。」（エレミヤ 31・34）

クリスチャンとして、神様の御言葉が私たちの心に書き記されていることによって、私たちはイエス様と親しく歩む力を与えられています。罪の中にある者とは異なり、私たちはイエス様に従うことを選ぶことができます。キリストの御霊なる神様が与えられ、私たちの心の内でさらにも働かれるために、神様の御言葉を読み、暗記することは明らかに必要です。しかし、神様は、私たちがイエス様のようにならせるために、内側の働きを約束されました。

それでは、救いに至るまで主なる神様の御言葉をどのように守り、また、どれほど主なる神様の御言葉を守れば「死を見ることがない」のかについて、どのように私たちは理解できるでしょうか。

キリストが来られて以来、ユダヤ人であれ異邦人であれ、キリストを信じるすべての者は今やイスラエルの家です。神様は、御言葉を覚えられるように私たちの心に書き記して、死に至るまで私たちの生涯を通して御言葉が働かれるように、クリスチャンにご自身の御霊なる神様を与えて

くださいました。このように、イエス様を愛するがゆえに、神様の戒めを守るクリスチャンは、決して死を見ることはありません。イエス様の教えのすべては、主なる神様のためにどのように生きるべきかを示す戒めです。イエス様を愛することは、すべてのクリスチャンに戒めとしてイエス様の教えに従いたいと願わせるのです。

しかし使徒ヨハネは、とにかくクリスチャンと呼ばれるためにだれでも必要なテストとしてイエス様の戒めのうちの1つを選びました。

ヨハネは、イエス様という光の中を歩み続けるなら、私たちは神様との交わりの中にとどまるだろうと強調しました。そのため、私たちは決して死を見ることはありません。ヨハネが選んだその戒めは、「愛」を中心に置くことです。

### イエス様と共に歩み続けて死を見ることのないために最も重要な戒め

イエス様が裏切られるその夜の最後の晩餐の席で、イエス様は使徒たちにくヨハネの福音書 13 章 34 節>で語られました。

<ヨハネの福音書 13 章 34 節>

そこで今、新しい戒めを与えましょう。わたしがあなたがたを愛するように、互いに愛し合いなさい。

使徒ヨハネは、その手紙の中で、イエス様のすべての戒めを守ることの重要性を語っていますが、とりわけ互いに愛し合うという戒めを強調しています。この手紙の中で、使徒ヨハネはイエス様の戒めを「古い戒め」として繰り返しました。使徒ヨハネは、イエス様が十字架につけられる前夜、最後の晩餐の席で最初にこの戒めをイエス様がお与えになったことを再び言及していました。

教会の皆さん、心からイエス様の戒めを守ろうとすることが、神様をご覧になっているものであることを覚えていてください。神様はたとえ忠実な従順において私たちがつまずくことがあっても、イエス様を愛そうとする私たちの願いを見ておられます。それでもなお、ヨハネは、キリストにとどまり続けるためのクリスチャンの交わりの中で警告を強調しています。それは<ヨハネの手紙 I 2 章 3-6 節>です。

<ヨハネの手紙 I 2 章 3-6 節>

**3** 私たちが神に属していることを、どうすれば確かめられるでしょう。それは、神の命令を守っているかどうかです。

**4** ある人が、「私はクリスチャンだ。キリストを知っている」と言っても、もしその人がキリストの命令に従っていなければ、うそをついているのです。

**5** キリストのみことばを実行している人は、ますます神を愛します。それによって、キリストにつながっている人であるかがわかります。

**6** 自分はクリスチャンだと言う人は、キリストと同じ生き方をすべきです。

そして<ヨハネの手紙 I 2 章 9-12 節>

**9** キリストの光の中を歩んでいると言いながら、兄弟（信仰を同じくする者）を憎む人は、相変わらず暗闇の中にいるのです。

**10** 兄弟を愛する人は光の中を歩む者であり、つまずくことはありません。

**11** しかし兄弟を憎む人は、暗闇の中をあてどなくさまよい、自分の行く先もわからない者です。暗闇のために、足もとさえよく見えないのです。

**12** I 子どもたちよ。このように書き送るのは、あなたがたの罪が、すでに救い主イエスの名によって赦されているからです。

これから私は、イエス様の十字架の栄光の直前に「新しい戒め」を私たちにお与えになったイエス様の強く強調されることも含めて、同じ信仰に生きるクリスチャンを愛することのこれらの聖句の意味について、詳しく取り上げていきます。

クリスチャンの兄弟を憎むことは、怒りの一瞬に起こる1度きりの罪の出来事ではありません。それは、クリスチャンの生き方に影響を及ぼす、継続的な実践です。罪を続けるクリスチャンのこの態度は、ヨハネの手紙で最重要な意味です。これは、〈ヨハネの手紙 I 3章6節／マウンス訳〉で訳されているように原語ギリシア語の動詞時制で明確です。

〈ヨハネの手紙 I 3章6節〉

**6**ですから、もし私たちが、いつもキリストのそば近くにおり、従順に従うなら、罪を犯し続けたりしないですみます。罪を犯す人々は、真の意味でキリストを知らず、キリストのものとなっていないからです。

これらの聖句を読む時、私たちはギリシア語の時制に十分注意を払うことが必要です。このことは、イエス様を愛する真のクリスチャンは罪を犯すかもしれませんが、罪を犯し続けることは無いということが明確になります。

〈ヨハネの手紙 I 3章6節／マウンス訳〉でヨハネが書いたことは、イエス様が意味されたことを、実際に聖霊なる神様が実際の生活の中で明らかにされたものでした。それはすなわち、兄弟姉妹であるクリスチャンを憎むことの生き方は、その人とイエス様との関係が脅かされるということです。

それは、その人が天国に至ることをそもそも危うくすることです。憎しみによって聖霊なる神様を絶えず悲しませ続けることは、クリスチャンを神様の守りの領域から外れさせてしまいます。〈ヨハネの手紙 I 2章11節〉に書かれている通りです。

〈ヨハネの手紙 I 2章11節〉

**11**しかし兄弟を憎む人は、暗闇の中をあてどなくさまよい、自分の行く先もわからない者です。暗闇のために、足もとさえよく見えないのです。

憎むことを習慣として行っている者も、この時点でまだクリスチャンであるということに注意してください。その人は、クリスチャンである兄弟を憎んでいるのです。しかしそのようなクリスチャンは、自分がどこへ向かっているのか分からなくなっており、憎しみによって目がくらまされています。その結果、その人はサタンの餌食となっています。使徒ペテロは〈ペテロの手紙 I 5章8節〉で、私たちすべてに警告しました。

〈ペテロの手紙 I 5章8節〉

最大の敵である悪魔の攻撃に備えて、警戒しなさい。悪魔は、飢えてほえたけるライオンのように、引き裂くべき獲物を求めてうろつき回っているのです。

「牧師先生、私はあるクリスチャンを憎んで苦しんでいます。 どうすればよいのでしょうか。」

もしクリスチャンが、誰か特にクリスチャンを憎んでしまうことで葛藤しているなら、その人は神様に、その相手への愛を自分の心の中に創り出してください。切に願い求めるべきです。神様は、私たちの罪深い心を、イエス様の心のように、汚れのない愛に満ちたものへと造り変え続けてくださいとの私たちの願いに、必ず応えてくださいます。それは、祈りの中でイエス様の御足もとにへりくだることにかかっています。

死を見ることがないために、どれほどイエス様の御言葉に従うべきかについての結論

私たちは、兄弟姉妹を憎むことには、敬虔な恐れを持ちますが、死の恐れは持たないように賢くなるでしょう。私たちはしばしば、「神様の愛は無条件である」と言います。これらの聖句は、神様の愛は無条件でないを示しています。しかし、私たちがイエス様を愛し続けることを願うならば、神様は、さらに聖霊なる神様が私たちに働いてくださるようにし続けてくださり、私たちの心を御子イエス様に似たものへと造り変えてくださいます。そしてその結果、私たちは、イエス様の戒めに従って成熟していくのです。

## イエス様と共に歩んでいる誠実なクリスチャンは死を恐れる必要はありません

イエス様が自分達を救ってくださったという誠実な信仰でイエス様と共に歩んでいるにもかかわらず、なお死を恐れているクリスチャンがいることを私は知っています。自分で「私の時が来た」と悟ることができると思っているクリスチャンがいます。これは、自分がまもなくこの世を去り、天国へと召されることを知ると考えているという意味です。

もちろん、医師の診断や命に関わる病気で自分たちの死を知ることはあるでしょう。しかし、イエス様はご自身の栄光のために、しばしば医師たちの見立てを覆されることがあります。私たちが基本的に健康であるのに「自分の時が来たのではないか」とあれこれ計算しようとすることは、私たちを不安や心配にさせます。

イエス様は<ルカの福音書 12 章 25 節／マウンス訳>で教えておられることを思い出してください。

<ルカの福音書 12 章 25 節／マウンス訳>

それに、くよくよしたところで、どうにもなりません。心配すれば、寿命が一日でも延びるのですか。

## 不滅へ、栄光へと至るクリスチャンの巡礼の道

私たちはすでに、神様の恵みがどのようにして私たちを天国へ向かう巡礼の道にとどまるように助けてくださるかを見てきました。この恵みは、私たちに従順を教え、あきらめずに歩み続けるために聖霊なる神様の熱心さと油注ぎを私たちに与えてくださいます。

あるいは、<使徒の働き 14 章 22 節>に「信仰にとどまり続ける」ようにです。

<使徒の働き 14 章 22 節>

それぞれの町でクリスチャンたちに会い、ますます神を愛し、また互いに愛し合うように教え、どんな迫害にもくじけず、信仰にとどまり続けるようにと励ましました。そして、「神の国に入るには、いろいろ苦しい目に会わなければならない」と語りました。

さて、これから私たちの前に備えられている不滅（私たちの永遠のいのち）について、聖書が私たちに語っているいくつかのことを見ていきましょう。はじめに掲げた聖書箇所、<コリント人への手紙 I 15 章 52-54 節>をもう 1 度思い起こしてみましょう。

<コリント人への手紙 I 15 章 52-54 節>

**52** 終わりのラッパが鳴り渡る時、一瞬のうちにそうなるのです。天からラッパの音が響くと、死んでいたすべてのクリスチャンは、たちまち朽ちない新しい体に復活します。次に、まだ生き残っている者もまた、一瞬にして新しい体に変わるのです。

**53** なぜなら、地上の死ぬべき今の体は、天上の決して死ぬことのない、永遠に生きる体に変えられなければならないからです。

54 この時、「死は勝利にのみ込まれた」（イザヤ 25・8）という聖書のことばが現実となるのです。

このコリントの教会への手紙を書くおよそ3年前に、使徒パウロは、キリスト者の復活の希望についてのイエス様の真理をすでに明らかにしていました。それは<テサロニケ人への手紙 I 4章 15-18 節>で分かります。

<テサロニケ人への手紙 I 4章 15-18 節>

15 私は主から直接聞いたとおりを伝えるのですが、主が再び来られる時、私たちがまだ生きていたとしても、すでに墓の中にいる人たちをさしおいて主にお会いすることは、断じてありません。

16 主は、大号令と、天使の長の声と、神の召集ラッパの響きと共に天から下って来られます。その時、まず最初に復活して主にお会いできるのは、すでにこの世を去っているクリスチャンです。

17 それから、なお生きて地上に残っている私たちが、いっしょに雲に包まれて引き上げられ、空中で主とお会いするのです。そして、いつまでも主と共に過ごすこととなります。

18 ですから、このことをわきまえて、互いに慰め合い、励まし合いなさい。

<ヨハネの福音書 8章 51 節>で、イエス様は「霊的な死」のことだけを意味しておられたのだ、と言う方がいるかもしれません。

<ヨハネの福音書 8章 51 節>

51 よく言っておきましょう。わたしに従う者は、決して死なないのです」と言われました。

クリスチャンは、神様のさばきの日の後に罪人が経験するような霊的な死を見ることは決してないことは確かです。しかしながら、ヨハネの福音書におけるこれらの聖書箇所は、霊的な死ではなく、肉体的な死を指しています。

ヨハネの福音書 8章は、イエス様に真っ向から反対したユダヤ人たちとの対話です。その聴衆は他のユダヤ人たち、そしてもちろんイエス様の弟子たちも含まれていました。<ヨハネの福音書 8章 23-24 節>でイエス様がこれらのユダヤ人たちに立ち向かいます。

<ヨハネの福音書 8章 23-24 節>

23 そこでイエスは言われました。「いいですか。あなたがたは地上に生まれた者ですが、わたしは天から来た者です。あなたがたはこの世の者ですが、わたしは違います。

24 だから、『あなたがたは罪が赦されないまま死ぬ』と言ったのです。わたしが神の子、メシヤであることを信じなければ、罪ののろいの下で死ぬしかないからです。」

ここで語られているのは、明らかに肉体的な死のことです。<ヨハネの福音書 8章 30 節>に見られるように、神様の恵みはイエス様に敵対する人々に対してさえも豊かに示されました。

<ヨハネの福音書 8章 30（31）節>

30・(31) この話を聞いたユダヤ人の多くが、イエスをメシヤと信じるようになりました。その人たちにイエスは、「わたしが教えたとおりに生活すれば、ほんとうの弟子と言えます。

なおもイエス様に反対していたユダヤ人たちでさえ、<ヨハネの福音書 8章 52 節>において、イエス様が肉体的な死を指して語っておられることを理解していました。

<ヨハネの福音書 8章 52 節>

52 「おまえが悪霊に取りつかれていることが、はっきりした。アブラハムも、偉大な預言者たちも死んだのに、『わたしに従う者は死なない』などと、よく言ったものだ。

パウロを通して復活についてのイエス様からの教えは、キリストが再臨されるときにすでに死んだ者たちが、生きていた者たちよりも劣った存在として扱われることはない、ということ強調しています。聖書は、今この「世の終わり」の時代に生きていたクリスチャンたちが、「不法の者」が完全に明らかにされる前でさえも、反キリストの霊の働きがますます活発になる中に置かれることを教えています。およそ紀元90年ごろ、使徒ヨハネは<ヨハネの手紙Ⅰ 4章3節>で明らかにしたことを思い起こしてください。

<ヨハネの手紙Ⅰ 4章3節>

しかし、そうでなければ神から出たものではなく、明らかに反キリストであり、キリストに敵対する者から出ているのです。この反キリストが出現することは、以前から聞かされていたはずで、彼らは今、至る所で、キリストへの敵意をむき出しにしています。

「それは反キリストの霊です。あなたがたがそれは来ると聞いていたものであり、今すでに世に来ているのです。」それは今から約1,936年前のことでした。

そして、<テサロニケ人への手紙Ⅰ 4章17節>には次のように記されています。

<テサロニケ人への手紙Ⅰ 4章17節>

それから、なお生きて地上に残っている私たちが、いっしょに雲に包まれて引き上げられ、空中で主とお会いするのです。そして、いつまでも主と共に過ごすこととなります。

私はイエス様の再臨、すなわち携挙のときに生きていたクリスチャンたちは、悪魔が地球を完全に支配しようとする直前にあって、より激しい霊的戦い（必ずしも肉体的な戦いではなく）を経験していることだと強く信じています。しかし、死を迎えるにせよ、携挙にあずかるにせよ、<コリント人への手紙Ⅰ 15章52節>にあるとおり時代に関わらず、すべてのクリスチャンにとって同じ経験となります。

<コリント人への手紙Ⅰ 15章52節>

終わりのラッパが鳴り渡る時、一瞬のうちにそうなるのです。天からラッパの音が響くと、死んでいたすべてのクリスチャンは、たちまち朽ちない新しい体に復活します。次に、まだ生き残っている者もまた、一瞬にして新しい体に変わるのです。

「またたく間に」というのは、私たちの内なる人、すなわち魂が主と共にいるために主のもとへ行くとき、クリスチャンは携挙されるクリスチャンと同様に、もはや死を見ることも味わうこともない、という意味です。私たちは地上におけるクリスチャンとしての学校を卒業し、私たちの主イエス様と共に統べ治めるために天国の故郷へと移されます。「それはあなたにとっても、私にとっても、聖徒たちよ、栄光となるのです！」

## 死における喜び？

これは生まれながらの人には、そしておそらく一部のクリスチャンにとっても、奇妙に聞こえるかもしれません。しかし聖書は、悲しみよりもむしろ、死における喜びについて多くを示しています。明らかな喜びとは、もし私たちが死を「通り抜ける」なら、今やイエス様にお会いし、イエス様と共にいるということです。しかし私は、私たちがこの世を去るとき、天国から送られる説明できない「喜び」の体験もまたあると信じています。

たぶん、私たちの定められた時が近づき、「私の時が来た」時には、病が私たちの体を痛みで打ちのめしているでしょう。しかし、死そのものは苦痛はないでしょう。聖書は<コリント人への手紙Ⅰ 15章55-56節>でそのことを語っています。

<コリント人への手紙Ⅰ 15章55-56節>

55・56「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」  
(ホセア 13・14) 罪、すなわち死をもたらすとげは、ことごとく切り取られます。そして、罪をあばく律法も、もはや私たちをさばきません。

クリスチャンは律法の下にあるのではなく、恵みの下にあります。赦しが与えられているということは、死がその「とげ」を失ったということを意味します。蜜蜂が1度人を刺すと、その針が抜け落ちて死んでしまうように、イエス様は死に刺されました。そして死は、私たちのために、そのとげを永遠に失ったのです。

## 人生における、そして死における喜びに驚かされている？

死に喜びがあるというのは、たしかに奇妙に聞こえます。しかしそれは、有名なクリスチャン作家 C・S・Lewis の救いの証しを私に思い起こさせます。この証しは、彼の著書『Surprised by Joy (喜びに驚かされて)』の中に記されています。彼はかつて、宗教に対して非常に攻撃的であり、その意見を公の場で積極的に主張する人でした。

しかし、大学で学業で忙しかったとき、神様の驚くべき恵みが彼を見いだしました。Lewis は『Surprised by Joy』の中で、次のように書いています。

「あなたは、Magdalen・(カレッジオックスフォード)のあの部屋で、夜ごと1人でいた私の姿を思い描かなければなりません。私の思考が仕事からほんの一瞬でも離れる時はいつでも、私が本当に心から会いたくないと願っていたその方が、着実に、たゆまなく近づいてくるのを感じていました。私が非常に恐れていたことが、ついに私の身に起こりました。1929年の3学期(トリニティ学期)に、私はついに降参し、神様が神様であられることを認め、ひざまずいて祈りました。おそらくその夜、私はイングランド中で最も打ちひしがれ、最も気の進まない回心者であったでしょう。」

Lewis は 1931 年にもこう書きました。

「こんなに気の進まない回心者である私を受け入れてくださる神様の謙遜さ！」

Lewis の気の進まなさはイエス様が Lewis を「喜びに驚かされる」ようにされ消失しました。この無神論者は、キリスト教界で最も多作な作家の1人となりました。

私は、多くのクリスチャンもまた、イエス様のもとにとげのない死を通して赴くとき、同じように「喜びに驚かされる (Surprised by Joy)」と信じています。クリスチャンは、信仰が小さくても大きくても、救いの信仰を持っています。私たちは皆、この世を卒業してイエス様とその栄光のもとにいるための恵みを受けています。

ですから、私たちは皆、私たちを救うために私たちに神様の大きい愛を示してくださったイエス様への愛に留まるための心になるよう祈りながら、イエス様の戒めに従い忍耐しましょう。そうすれば、あの栄光の日まで、私たちはイエス様と共に揺るがされることなく心静かにいることができるのです。

私はこのメッセージを、20世紀の「I' ll Fly Away (私は飛び立つ)」とう題の讃美歌で締めくくりたいと思います。この讃美歌は、全てのクリスチャンが「私の時が来たとき」について抱くことのできる前向きな心の態度を表しています。

### 1番

この世の人生が終わるときのある喜びの朝、  
私は飛び立つだろう；

神様の天の岸にある家へ、  
私は飛び立つだろう。

2 番

この世の影が去ったとき、  
私は飛び立つだろう；  
囚われた檻から鳥が飛び去るように、  
私は飛び立つだろう。

3 番

もうあとわずかの疲れた日々だけ、そして私は飛び立つだろう；  
喜びが永遠に尽きることのない土地へ、  
私は飛び立つだろう。

コーラス

私は飛び立つ、ああ栄光よ、私は飛び立つ；  
私が死ぬとき、ハレルヤ、やがて私は飛び立つだろう。

祈りましょう！ 聖餐式です。